

“転換期”は 教師にいかなる“質”を要請しているか

今津 孝次郎（名古屋大学）

1. “転換期”

一口に転換期といっても、さまざまなレベルで捉えることが可能である。教師教育に焦点を合わせながら、次の三つのレベルに区分してみたい。

- (a) 教員養成
- (b) 教育の全体的システム
- (c) 社会構造

以上三つは、転換期を分析する視点としてのミクロからマクロレベルへという配列であり、教師教育にとっては、直接的・制度的・具体的レベルから間接的・実態的・理念的・抽象的なレベルへという区分でもある。

本発表では、とくに(b)のレベルに焦点を合わせながら、教師教育の世界的動向にも注目しつつ、教師教育の転換期をできるだけ原理的に明らかにしたい。そしてその観点から(a)レベルにおける日本の教員養成制度改定の特徴についても指摘したい。

2. “質”

教師の質の向上は、教育が“質”の時代を迎えたといわれる1970年代後半以降、学校教育上の重要な課題として世界各国で共通して認識されている。ただ、教師の質をめぐるのは、二つの捉え方に大別できるだろう（今津、1988）。

(ア) 教師の質を教師個人が身につけている知識、技術、態度に求めるものである。

(イ) 教師-生徒関係を中心とする教師の役割行動を改善し、学習効果を高めるために、授業（teaching）を核とした学校教育

（schooling）そのものの質を向上させていくことが教師の質にとってもっとも大切であるという捉え方である。Wilson(1988)に従うと、授業の質とは、学習者としての子どもたちにとって最大限適切な授業計画をたて、授業を行い、授業の評価をするという三つのプロセスによって構成される。したがって、このプロセスを遂行するために必要な基礎的知識、技術、態度が求められる、といってもよい。

もちろん、これら二つの捉え方は、それぞれの社会の教師像のあり方と関わっているが、端的に言えば、(ア)は教師の質に

関する伝統的な意見であり、(イ)は革新的な意見だといえる。

そして、世界の動向は基本的に(ア)から(イ)へと移行しつつある（今津、1989）。なぜならば、(c)で示されたような社会変動に対応する(b)での「生涯教育」原理のもとでは、教師の質の捉え方としては(イ)の方がより適合的だからである。つまり、変動社会においては、学校は常に新しい知識・技術の学習を期待されるとともに、学校は予期せぬようなさまざまな問題を次々と抱え込む。それらに対応していくには、少なくとも、以下の3点が重要になってくるからである。

① “完成”された教師という考え方では時代の変化に適応しにくい。

② 教師はもはや権威的全能者ではない。教師は一定の知識を一方的に教え込む立場から、むしろ生徒の学習を動機づけ、促進させ、援助する立場へとその役割を変更する。

③ 学校教育の質を高める源泉は、教師が勤務する学校の現実在即しながら（school based）授業を中心とする教育課題を共同して実践的に研究することのなかにある。

ところが、日本では依然として(ア)の意見が根強い。もちろん、一方では、教師のサークルや教職員組合などのなかでは、以前から(イ)の意見も主張されてきた。そして現在では、(ア)(イ)両方の意見が、教師・教職員組合・保護者・教育委員会・文部省・マスコミ・あるいは大学研究者などの間で分極化したり、混在したりしている状況である。

3. 教師教育パラダイム

(1) 教師教育過程と教師教育パラダイム

ところで、教師教育過程を図示すると図1のようになる（今津、1990）。このうち、私たちにとってもっとも身近で関心の深い問題は、教員養成カリキュラムや取得単位構成に関わる「教師教育プログラム」である。しかし、より重要な問題は、そうした具体的な「教師教育プログラム」を生み出す「教師教育パラダイム」の方である。

「教師教育パラダイム」とは、学校教育や授業、教師そして教師教育の性格や諸目的に関する信条や仮説のマトリックスであっ

て、教師教育の實踐に種々の明確な形を与えるものである (Popkewitz, Tabachnick & Zeichner, 1979)。このパラダイムは比較的長期間にわたって形成されるもので、教師教育に携わる者の間で暗黙のうちに分かちもたれており、意識化されることは少ないが、教師教育の内容や方法に一定の具体的な方向性を与えるものである。こうした「教師教育パラダイム」に注目すると、教師の質に関する二つの捉え方は「教師教育パラダイム」を構成する重要な基本要素である。

(2) 教師教育制度改定にみる教師教育パラダイム

教免法や初任者研修を中心とした教師教育制度改定の狙いは教師の「資質の向上」であった。しかし、そうした改定に見られる特徴は、教師の質を高める目的でそのプログラムを刷新したように見えるけれども、教師の質そのものの捉え方は従来と同じく

(ア) の考え方が継承されており、教師教育政策の背後にあるパラダイム自体は何ら変化してはいないと判断される。

(3) 教師教育の新しいパラダイム

では、教師の質(イ)を核にした新しいパラダイムとはどのようなものなのか。現在、カナダ、アメリカ、イギリス、オーストラリアなどで似通ったパラダイムによるプログラムが実践的に研究されているので、それを紹介しておきたい。それは、「探求的方法 Inquiry-Oriented Approach, Enquiry-Based Method」と呼ばれ、アクションリサーチの思想をより批判的なものに押し進めたものである。代表的な論者としては、大学の教員養成段階で研究しているウィスコンシン大学の Zeichner(1983)、現職教育段階で研究しているケンブリッジ現職教育研究センターの Nias(1989) などがいる。

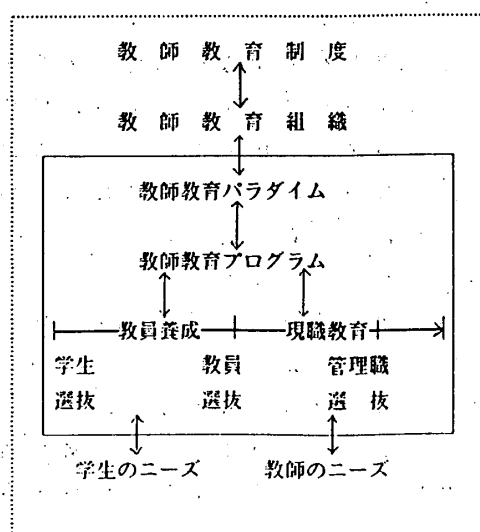


図1 教師教育過程

「探求的方法」とは、教員養成や現職教育をこれまでのような見習い訓練として考えるのではなく、教育革新を探求し、革新を実際に担い上げる主体として自ら成長を遂げていくことのできるような教師教育の捉え方である。それは、伝統的・固定的に把握された教師像に合わせるための職業訓練ではなく、教育革新を検討し、実現することのできる新しい教師に常に自己変革できる能力と態度の教育を示している。それはいわば教師の「自己教育」だともいえる。

4. 「教師教育」研究における大学と学校との関係

「教師の発達」や「学校の現実」に即した school based、「探求的方法」などに関して、大学はこれまでいかなる取り組みをしてきたか、今後いかなる取り組みをしようとしているか。教師教育パラダイムの革新に寄与しうる大学の役割が大きいだけに、教師教育の転換期において問われているのは、教師教育政策・制度の側以上に大学や研究者の側であろう。

教師の質(イ)を核とする教師教育パラダイムを現実化していくためには、学生のニーズや教師のニーズに耳を傾けながら、どのような教師教育プログラムを具体的に創出していくか、がこれからの課題である。

【文献】

- 今津孝次郎(1988)「教師の現在と教師研究の今日的課題」『教育社会学研究』第43集。
- 今津孝次郎(1989)「教師の能力を高めるために—第1回アジア太平洋『教師教育』会議の討議から—」『書斎の窓』362号、有斐閣。
- 今津孝次郎(1990)「教師教育に関する国際比較のための理論枠組—序論的考察—」『環太平洋圏における文化的・社会的構造に関する研究』名古屋大学環太平洋問題研究会。
- Nias, J. & Groundwater-Smith, S. (1989) *The Enquiring Teacher* The Falmer Press.
- Popkewitz, I., Tabachnick, B. & Zeichner, K. (1979) Dulling the Senses: Research in Teacher Education, *Journal of Teacher Education*, vol. 30.
- Wilson, J. D. (1988) *Appraising Teaching Quality*, Hodder and Stoughton, chap. 2.
- Zeichner, K. H. (1983) Alternative Paradigms of Teacher Education, *Journal of Teacher Education*, vol. 34.